

浄土

1990-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三三五号
平成二年二月二十五日印刷 平成二年三月一日発行
第五十六卷 三月号





三月の秀句

三月やモナリザを売るいしだたみ

春分の湯にすぐ沈む白タオル

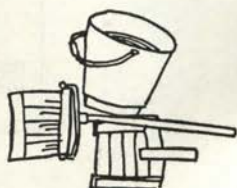
山国に雪の彼岸の一会かな

秋元 不死男

飯田 龍太

金田 あさ子

三月号



阿弥陀仏兼てさとりたまいて、五劫の間思惟しての四十八願をおこしたまえり。——『念仏大意』

目次

—法 話—

- オーバー60のめざめ……………坂 野 泰 巨……(2)
- 橋慢の心に魔縁あり……………村 瀬 秀 雄……(9)

◇特別寄稿◇

- 須弥山世界の矛盾(下)……………後 藤 真 康……(16)
- 科学と宗教のはざままで——

《四行詩二題》

- 門出・彼岸桜……………清 川 宗 治……(26)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <36>

- 海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(29)
- 我が思い出に住む犬たち(22)——

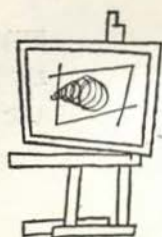
◇◇長篇連載◇◇

- 伝弘の生涯(15)……………松 浦 行 真……(37)
- 大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

法
話

オーバー60のめざめ



さかの
坂野 たい
泰 ぎよ
巨

(茅ヶ崎市西蓮寺住職)

たとい七八十のよわいを期すとも、思えば夢のごとし。

いわんや老少不定なれば、いつを限りと思ふべからず。

さらに後を期す心あるべからず。

ただひとすじに念仏すべしということ、そのいわれ一つにあらず。

このおことは、法然上人が念仏者の心得を、十二カ条の問答形式にして教え示された

もののなかから、とりあげさせていただきました。

人はみな七十、八十歳まで生きられると思つてゐるのですが、それをあてにしていることは、まことにはかないことです。それも、法然上人の時代の七、八十ですから、たいへんなものです。今日的には、九十、百歳ということでありましょう。

まして、この世は老人が先、若者が後に死ぬとは限らないのです。人の寿命は定めのないものであります。「ただ今」に視点を置くことが大事であつて、ただただお念仏の日暮しをさせていただくことが肝要であると、お示しくださっています。

自分だけは大丈夫だと思ふ気持は、いつの時代も同じなのです。

ある檀徒は、六十歳の定年のとき、お母さんを亡くされました。斎場の待合室でこんなことを言われました。

「方丈さん、寺と檀徒の関係は平生が大切だと言われましたが、私にもよくわかります。しかし、実際には勤めてみると、なかなか信心をするだけの余裕がなかったのです」

本来、信仰と日常生活とは無関係であつてはならないのですが、私は反論をしませんでした。

「そうかも知れませんね。気持はわかりますよ。まあ、これからはひとつがんばってください」

とお話いたしました。

人生五十年の時代でしたら、もう乗り遅れであります。今日は人生八十年代です。

法然上人の「もっと急ぐべし、励むべし」のおことばを思い出して、何しろ、「急いでお乗りください」という気持でいっぱいでした。

アンダー60（六十歳まで）の人生は、いわゆる衣食住を中心として、お金や地位にやむなく心を奪われてきたが、オーバー60（六十歳から）は、少しでも信仰にめざめた人生にしたい、ということであってほしいのです。

誕生日がきて、「またひとつ年をとった」ということは、「一步、死に近づいた」ということです。「年をとる」ということは、「年をとった」というプラスの存在ではなくて、ほんとうは、「年をとられた」というマイナスの存在であります。つまり、自分のいのち

の砂時計が、刻々と減っていつていくということなのですね。

私は、たまに大きな砂時計を何度も何度もひっくり返してみても、それをじっと見つめています。私の寿命もこんな速さで減っているのかと思うと、「ああ、いたずらにすごしていてよいのか」という気持にさせられます。

東井義雄さんの人生詩のなかに、「うんともすんともいわず」というのがあります。

ゆうべの間に

ひげがのびている

しらん間に

うんともすんともいわず

ひげがのびている

いのちの方は

うんともすんともいわず

ちぢまっているというのに

ひげがのびている

いや

うんともすんともいわず

刻々とちぢんでいくいのちを

わたしに知らせるために

そつと

ひげが

信号を送ってくれているのかもしれない

うんともすんともいわず

ちぢまっているいのちを

わたしに

知らせるために

ひげがのびているということは

わたしが生きているということ

生きているということとは

死ぬいのちをかかえているということ

ひげをなでる

うれしいような

さびしいような

愛しくてならぬ

このなまあたたかい

生きていることの

肌ざわり。

オーバー 60 は、アンダー 60 とはちがった人生観があるはずです。東井さんの詩のように、失われていくものも少しずつ増えてはきますが、得させていただけるものも多いのです。

それは、今まで見えなかったものが見えてくる、ということではないでしょうか。気づかなかったことに気づかせていただける、ということ。そこにこそ、生かされるよろこびを感じとることができるのです。これが人生にめざめるということではないかと思うのです。

もし、そうしたこともなく、

世の中は 食うて稼いで寝て起きて

さてそのあとは 死ぬるばかりぞ

という一休さんの句のように、ただ長生きをして、死を待つだけの生活だとしたら、自分

はこれからどこへ行くのか、そこはどんなところか、宿はだいじょうぶか、なども知らずに旅立つようなものです。まことに不安ですね。

『仏教東漸史』によると、アメリカ仏教は百年たらずの歴史ですが、特に、禅はアメリカの各地に根を下ろしつつあるようです。これらは単に禅を体得したいというのではなくて、人間にとって本質的、普遍的な大切なものを求めて禅に入っていくということです。つまり、本物の仏教が真剣に求められているのです。

ところが、日本ではどうでしょうか。

ある学者の説くように、日本人の宗教とのかかわりかたの特質は、「一時的・表面的・

功利的・開放的」だということです。そして、シンクレティズム（宗教の複合性）が挙げられています。

日本人は、「宗教が人間のかかえている根本的な問題（生老病死の苦悩）の解決にかかわるものである」ということに、気づかないでいるのかも知れません。

「念仏とは、阿弥陀仏といっしょに暮すこと」です。法然上人は、「念仏申しながら勤めよ、後生のことを第一念にして、日常のこととは第二念にせよ」といわれています。お念仏はお浄土への通行手形（許可証）となるのです。

ですから、お念仏をつねにお称えしていればよいのですが、お念仏だけですと易行すぎ

て、どうしても単調になりがちですね。

そこで、五種の正行（しょうぎょう）といわれる実践行があります。先徳によりますと、正行とは、阿弥陀仏に親しみ近づく行ということです。

一、読誦正行（どくじゆ）

お経を読むということです。それも浄土三部経を読むということです。一般には、浄土宗の日常のおつとめ（お経）を読まれたらよいでしょう。

二、観察正行（かんざつ）

阿弥陀仏やお浄土のありさまに心をそいで、それを思い描き、観察することです。

三、礼拝正行（らいはい）

もっぱら、阿弥陀仏を礼拝することです。

四、称名正行（しょうみょう）

一心にもつばら、お念仏（南無阿弥陀仏）を称えることです。

五、讃歎供養正行（さんだんくよう）

もつばら、阿弥陀仏のお徳を讃めたたえ、ご供養をすることです。

これが五種の正行であります。これとは反対に、「雑行」（ぞうぎょう）というのがありますが、阿弥陀仏に疎遠の行で、浄土の教えには縁の薄い行なのです。要するに、他宗の行も取り混ぜてやっていますと、何が信仰の中心なのかわからなくなってしまう。そのため、正行に帰さなくては、本物の念仏信仰は得られないのです。

この五種の正行のうち、第四の称名念仏が極楽往生を約束された確かな業ですが、この

念仏の行を助けるものとして、読誦や観察や礼拝や讃歎供養などの行があるのです。

このことを徹底していない多くのお寺にも責任がありますが、みなさんの家庭においても、みなさん自身にこのことがなされるようになれば、新しい時代に生きる真の念仏者になっていただけることと信じます。

もういちど、東井義雄さんの詩です。

「老」は／失い 失い 失い 失い／失い
いつくして亡んでいく過程／その過程の
中で／目覚め 目覚め 目覚め 目覚め
／生死を超えたまことのいのちに目覚め
ていく過程／無量寿の世界に生まれてい
く過程……。

憍慢の心に魔縁あり



村瀬秀雄
むら せ ひで お

浄土宗第二祖鎮西上人として知られている
聖光房寺長は宗祖上人を尊んで、次のように
いつていた。

「自分にとっての大師釈尊は、ただ法然上人
だけである」

弁長は十四歳から二十九歳に至るまで比叡
山で勉強し、天台教学の奥義を究めたという
當時有数の学僧であった。弁長は三十二歳の
頃から今生の名聞利養を捨てて来世往生の修

行を求めたいと願っていた。そこで都に上つ
たついでに、吉水のご房に宗祖を訪れた。し
かし弁長が内心で考えていたことは「いかに
法然上人の知恵が勝れて正しく判別していた
にしても、自分が会得している範囲を出るも
のであるまい」ということであった。訪問を
受けた宗祖は弁長が天台の学僧として著名で
あることを知っていたので、初対面であった
にかかわらず念仏の法門を詳しく説いて聞か

せた。宗祖の説法は午後二時から始めて夜中の十二時に及んだというのであるから、いかに多方面にわたって懇切に説いたかが想像される。これによって弁長は宗祖に心服させられたのであったが、その時の様子を次のように伝えている。

「弁長にとっては、あだかも靈山の崑崙山を仰ぎ見たようであり、神仏が住む靈山の谷底をのぞき見たようであった。弁長は自分が最も高い山であると思っていた自負心が消え夫せて、遙かに高い上人の学徳を渴仰する気持が深くなった」

時に宗祖は六十五歳、弁長は三十六歳であった。宗祖は浄土宗という名は古くから中国で使われていたのであって、自分が初めて唱えた宗名ではないと説いている。それはそれ

として浄土宗の教えを開いたのは宗祖であったことに間違いがない。しかも宗祖は「釈尊がこの世に現われ給うたのは阿弥陀仏の本願を説いて、念仏の行を勧めようとする御心からであった」と説き、念仏の法門こそは「釈尊にとつては出世の本懐の教えである」と教えているのである。こうして浄土宗を開いた宗祖こそ、弁長にとつては正しく釈尊の再来であったのである。

宗祖が浄土宗を開いたのは、善導大師が次のように説いている一句によって心眼を開いたからであるといわれている。

「一心に専ら南無阿弥陀仏と唱え、行住坐臥の何れの時でも時間の長短に関係なく、常に念仏を相續してゆけば、その者は必ず極楽浄土に往生することができる。このように念仏

を相統して唱えることを正定の業という」

しかし大師のこの言葉の前に、いわゆる二種の深心が説かれていることに注意しなくてはならない。二種の深心というのは、大師が次のように説いていることである。

「第一に己れを自覺して罪業の多い身であることを深く信ずるのである。第二に罪深い凡夫にとっては阿弥陀仏の慈悲を仰いで極楽浄土に往生することを願う教えによるのでなければ、悟りを開く道が全くないことを深く信ずるのである」

このように第一には己れを自覺して煩惱具足の凡夫であることを深く信じ、その上で阿弥陀仏の本願を仰いで念仏を唱えるのである。このようにわが身は煩惱具足の凡夫にすぎないことを信ずることを信機といい、仏の本願

を深く信ずることを信法という。この信機と信法について、宗祖は次のように教えている。

「この世の生活は相互に疑心暗鬼を懷きながら暮しているが、極楽往生するためには疑わずに信ずる心が大切である。何を信ずるかといえ、初めに己れの実態を見極めて、念仏往生の外に救われる道がない凡夫であることを深く信ずるのである。次には阿弥陀仏がすべての凡夫を救い給うている慈悲を深く信ずるのである。己れを信ずる信機と、法門を信ずる信法の二つが深心である。この二種の信心をもつことによって、初めて往生することができる」

ある人が宗祖に向つていうのに「上人は勝れた学僧ですから念仏の功德を詳しく弁えておられますし、本願の意味は十分に心得てお

られます。ですから上人が唱えている念仏は、その一声一声が仏のみに叶っていることでありましょう」と。すると上人はいった。

「貴方は阿弥陀仏の本願を信ずる心が浅いのである。本願の念仏は賤しい職業とされている木こり、草刈り、菜つみ、水汲みのような人でも、知識が乏しく暮しが豊かでない者でも、読み書きができない者でも、念仏を唱えればすべて必ず極楽往生できるのである。本願を信じて真実の心から往生したいと願い、常に念仏を唱えている者こそ必ず往生できる最上の人である。もし知恵を究める修行によって迷いの世界から抜け出せるならば、何んで源空が聖道門を捨てて浄土門を選ぶことがあったであろうか。聖道門の修行は智恵を究めることによって次第に生死の世界から離れ

ようとするものであり、浄土門の修行は智恵や才覚を加えることをせず、本願力に身をまかせて念仏を唱え、極楽往生してから直ちに生死の世界から離れるのであると知るべきである」

またある時に弟子たちが来世の往生について話し合っていたが、一人が往生は魚を食べない者こそできるといった。すると側から魚を食べる者の方が往生できるという者があった。こうして魚を食べるか食べないかについて論じ合っていたが、宗祖は弟子たちの話を聞いていった。

「魚を食べる者の方が往生できるというのであれば、鵜こそ第一に往生できるであろう。魚を食べない者の方が往生できるというのであれば、猿こそ第一に往生できるであろう。

往生は魚を食べたからできるものでないし、食べないからできるというものでない。ただ念仏を唱える者だけが往生できるということ、源空は知っているだけである」

華嚴宗の中興の祖といわれ、戒律を堅持していた高弁は宗祖入滅から間のない建暦二年十一月に摧邪輪を著わして選択集を強く非難した。高弁は当時の学匠であっただけに浄土宗に大きな影響を与えたが、その摧邪輪の初めに「自分はこれまで法然上人を深く仰信していた。これまでにいろいろな邪見を聞いていたが、何れも上人の高名をかりて説いているものと思っていたので、何もいったことがなかった」と記している。これは当時名の高い学僧であつたからこそ宗祖の学識と人徳をよく知って敬意を表していたからである。宗

祖は一切経を読むこと五遍に及び、智慧第一の高僧であるという評判がどこでも聞かれたし、多聞広学の名僧であるという噂が広まっていたのである。それなのに宗祖は常に次のようにいつていた。

「己れは十惡を犯す法然房、知恵のない法然房はただ念仏を唱えて極樂往生したいと願っているだけである」

こうした宗祖が学識に自信がある高弁と合うわけがなかった。宗祖は念仏の行者が心得ていなければならない注意を述べているが、その中に次のような一節がある。

「実しやかに念仏を唱え、もっともらしい念仏行者になると、他の人を見て自分の心より劣った甚だ至らぬ人のように思えてくる。自分分は真実に精進している立派な念仏行者であ

ると自負するようになり、誰れ誰れよりも勝れていると思うようになる。このように慢心することは、よくよく慎まねばならない。世間は広いし人も多いのである。山の奥や林の中に籠って暮している念仏行者の中には、人に知れていなくても尊く立派な人がやはり多いのである。ただ聞いたことがないために知っていないだけのことである。それなのに自分だけが勝れていると思うのは大きな間違いである。このように自分だけが勝れていると思うのは大僣慢であって、凡夫という自覚がなくて三心を欠いた人である。もし僣慢の心を起すと、それに付け入って名聞利養を求める魔縁が近づて、その人の往生を妨げることになる。それはわが身の勝れた修行によって罪業が減せられ、極楽往生ができると考える

からである。そうではなくて念仏を唱えれば阿弥陀仏の慈悲に浴し、煩惱を除いて罪業を消すことができるし、忝なくも来迎し給うた阿弥陀仏が手づから行者を蓮葉台に迎え、行者を導いて極楽浄土に帰し給うのである。自分の修行の力によって往生できると思うからこそ、己れの才知が勝れていると思う慢心を起すのである。もし僣慢の心を起したとすると念仏の心も行も全く違ったものとなり、そのまま阿弥陀仏の本願に背くことになって、阿弥陀仏も諸仏も護念し給わぬのである。そうしなければ悪鬼邪神が近づいて悩まされることになる。返す返すも自ら慎んで僣慢の心を起してはならない」

僣慢の心こそ念仏行者にとって許すことができない魔縁のもととなるのである。

好評

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、
讀重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、發願文、五懺
悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降
魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る 念仏の法門
B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳 念仏の要諦
B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人 勅修御伝
B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳 浄土三部経
B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人 選択集
B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師 観經四帖疏
B6判五八四頁
価三、五〇〇円

和訳 善導大師 六時礼讃
B6判二六五頁
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ
一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)

雄 秀 瀬 村 編 訳

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

寺 念 常 行 所 發

電話 0465-43-1352
振替 横浜 3-8296番

《特別寄稿》

須弥山世界の矛盾
(下)

— 科学と宗教のはざまで —



円通上人と佐田介石師

さて、そこで円通上人の世界観であるが、上人は「仏国曆象編」等で須弥山世界観の復活を図り、仏教天文学である梵曆を提唱するにあたり、こうした矛盾点をどう解決された

後藤真康
（東京・江東区円通寺住職 農博）

のであろうか。「仏国曆象編」は未読であるが、「須弥山儀銘並序和解」「実験須弥界説」(この二編は父が古本屋で買ってきた物が手元にある)を拝見したかぎりでは、はっきりした説明をしていらっやらない。上人の主張はもっぱら曆法、つまり日月星辰の動きを予測する点において梵曆が優れていることを説くことにあり、その背景の世界観の考察にまではあまり進んでいないように思える。存統上人と違って西欧人の世界一周の事実は認めているのだが、それはあくまで「地球一周」であって「世界一周」では無いと主張されている。西欧人はかつてアメリカやメガラキア(上人はこれらは閻浮提付属の二中州だと考えている)の存在を知らなかった所以他们の昔の地図にもそれらは載っていない。したがって今、閻浮提以外の大州や須弥山が見付かっていないからといってそれが存在しないとは言えない。西欧人が大西洋を西に進んでアメリカに達したのは閻浮提の上の北海を通して行ったのかも知れない、と主張されている。ところが北海まわりだどこかで西と東が入れ代わることになってしまう筈である。地球という言葉を平気で使っているのも不思議である。須弥山説による限り人間世界は平面なのである。これを固執しようとすれば、存統上人のように世界一周を強引に否定する外はない。ところが「地平説」「天面説」には前述の矛盾があるがそれには触れていない。こうして見ると円通上人の思考の合理性には限界があったと思えるのである。

円通上人の説を踏襲した明治時代の護法主義者、佐田介石師はさすがに前述の矛盾を無視しえなかったようである。師は考える。世界には上下があり、水が下方へ流れるのは不變の法則である。地面が球面なら水は周辺へと流れ下ってしまうから地面が球である筈はない。須弥山説の説くように地面は平面であり、水が世界から流れ去ってしまったように支えているのが「金輪」である。それなら何故地平線が曲線に見え太陽は地平線に沈んでゆくのか。その説明として師が考案したのが「視実兩象の理論」である。これは簡単にいえば、天が円く見え、太陽が地平線に沈んでゆくように見えるのは目の錯覚であるというものらしい。ただし、錯覚といってもデタラメなものではなく、一応の法則がある。その法則に従って錯覚（視象）を修正していけば宇宙の真の姿（実象）が分かると言う。それを説明するために作られたのが「視実等象儀」なのである。私は先に「視実等象儀は世間の物笑いになった」と書いた。しかしこうして考えてみると、一見もっともな理論のようにも見える。少なくとも、地平線を合理的に説明しようとした理論としてはただ一つのものであるといえよう。

ではそれで本当に説明がつくのかといえ、そうはいえない。視実兩象の理論では經典に書かれたことをそのまま実象とし、目で見た結果を視象としている。しかし、何故実象と視象が異なるのか、視象と実象のどちらが正しいのかはわからない。また視象だけから

実象を導き出すことができない。視象と実象の間には一定の法則があると言うのだが、その法則も仏教を無条件で正しいとし、それと実際に見た結果とが同じになるよう強引につじつまを合わせたものと見ることもできる。もし視象が錯覚で仏説は無条件で正しいとするならば、円通上人らのように日月星辰を観測した結果から仏説の正しさを実証しようとすることは無意味になってしまう。やはり視実両象の理論は本当の意味での合理的な理論とは言えないのである。

視実等象儀の一つはいまも上野の科学博物館に保存されている。先日久し振りに観覧したら、昔と同じ三階の古時計展示室内にひっそりとおかれていた。説明も簡単なものしか付いておらず、今の観覧者でこの機械の目的のわかる人はほとんどいないであろう。どう見ても説得力のある代物には見えないが、先人の苦心の跡を偲んできた。

科学的宇宙観と宗教的宇宙観

これまで主として須弥山世界観の地平線の矛盾を指摘してきた。実際に世界一周をしてみなくても、地平線や太陽の軌道から考察しただけで地球説の方が合理的なことは明らかである。それでは何故天動説ではなく地動説なのか。これに答えなければ橋本凝胤上人への答は完全にならないのだが、そのためにはどうしてもニュートンの力学を持ち出さない

わけにはいかない。俗に、ニュートンはリンゴの実際の落ちるのを見て引力の法則を発見したと言われるが、実はそんな簡単なものではない。わかりやすくいえば、ニュートンはリンゴの実は木をはなれると地面に落ちるが、同じくささえるものがない月は何故落ちてこないのかと考えた。そして月は地球の回りを回転しており、その遠心力と引力が釣り合っているのだと判断した。つまり、物体は外から力が働かない限り静止しているか等速直線運動をしている。月は直線運動をして飛び去るかわりに地球の引力に引かれて回転運動をしている。リンゴの実には、地球の引力しか働かないので地面に落ちる。このように物体の動きと力の間に一定の法則があると考え、「力と運動の法則」を発見したのである。いまここで物理学の復習をしている余裕はないが、とにかくこの法則によって、あのガリレオが発見した「物体の落下速度の法則」や「振り子の等時性」、ケプラーの発見した「惑星の運動の法則」等がすべて統一的に説明できるのである。つまりニュートンは宇宙のすべての物体、地球上の物体から天体まですべてが同じ法則で運動していることを発見し、その元となる普遍的な力として「万有引力」を導き出したのである。この法則に従えば月は地球の回りを巡り、地球や他の惑星は太陽の回りを巡っていると考えるのが一番合理的なのである。地球と太陽の関係だけで見れば、太陽が地球を回っていると地球が自転しているとしても同じに見える筈である。しかし、地球が自転しているだけでは太陽の

引力に引き付けられて衝突してしまふ。さらに、他の星との関係も含めて考えると地球は自転しつつ太陽の回りを回っているとするのが一番合理的な説明であり、観測結果ともよく合致するのである。須弥山宇宙観では太陽や月は五種類の風によって浮かび動いていると説く。これだと、月と太陽が異なる速度で、しかもそれぞれが一定の速さで動いているのは全く別の原理によるのだとしか考えられない。自然科学では自然現象をなるべく単純で統一的な原理で説明しようとしている。それでなければ応用ができないからである。

ところで、佐田介石師は水が下にながれ、炎が上にあがるのは自明の理だとした。また、多くの人々は大地は宇宙の中心にあって不動なのも自明のことだとした。これに対し、ニュートンは物体は下に落ちるのではなく地球に引かれるのだと考えた。ニュートンの宇宙観では絶対的な上下の関係は存在しないし、動く、動かないは相互の相対的な関係であると考えるのである。したがって地球の裏側に人が住んでいても不思議ではない。地動説は別に太陽が主で地球が従だと言っているのではなく、二つの物体の運動の関係を述べているにすぎない。ここらへんに宗教と自然科学の違いを考えるヒントがありそうである。

円通上人らが何故あんなに西欧的宇宙観を嫌ったか、それはキリスト教会で地動説を弾圧したのと同じ理由によるのであろう。すなわち地動説は上下関係や不動のものを否定しているように見えるからである。天界は上にあって貴く、地獄は下にあって卑しい。大地

は不動にして万物を支える。これを否定しては道德も宗教もなりたない。これが護法運動の最大の動機であつたと思われる。ところが、物理的な上下と道德的なうえしたの間には本来関係はない筈である。机の上に茶碗があるから茶碗は机より貴いとは限らないのである。ところが仏教にかぎらず古代の宗教的宇宙観では物理的な上下関係と倫理的な価値とが混同されている場合が多い。近代自然科学はこうした倫理道德的価値観、あるいは芸術的価値観を一応切り離そうとした。そして、客観的に自然現象を観察し合理的に思考して、できるだけ統一的、普遍的な法則を発見し、実験によってその法則を実証しようとした。物体は下に落ちるのではなく、引力によって動くと考えたところから統一的な力学が生まれた。力と運動の法則は多くの実験によって実証され、産業の土台となった。このようにして近代の自然科学は成立したのである。そして自然現象を理解し記述するにはこれが一番正確で能率的な道であることが今では明らかになっているのである。

このように自然科学はその発展の過程で道德的価値観や芸術的観点を切り離した。しかしそれはあくまで「切り離した」のであって否定したのでも無視したのでもない。同時に自然科学はその対象を人間が取り扱い、実証することのできる自然現象に限定した。したがって人間は自然科学だけでは生きていけないのである。人間にとっては科学以外に芸術も道德も宗教も同じように必要なのである。自然科学はそれ自体の独立性をはっきりさせ

ることによって、芸術や宗教の価値をはっきりさせることになったといつてよい。それは宗教が政治と切り離されることによって、かえつてその独自の価値がはっきりしたのと同じである。信仰は理論ではない。人が美しいものに感動し、貴いものに頭を下げるのは理論を超越したなにかを感じるからである。自然科学では須弥山や天国の存在を証明できないから、仏も神も存在しないと考えるのは科学を本当に知らない人である。優れた科学者はしばしば深い信仰の持ち主である。この辺りが十分理解されていれば、自然科学の進歩を宗教への脅威と感ずる必要はないのである。まして宗教の裏付けを自然科学に求めることが真の護法にはならないことは明らかである。

円通上人の時代には科学と宗教の関係はこのようにすっきりとは割り切れていなかった。いや、円通上人や佐田介石師らの試行錯誤の苦しみのなかからこうしたことが明らかにされてきたともいえるのである。存統上人もまたこうした試行錯誤を為されたのではないかと思う。そして本誌五十五卷三月号にすでに書いたように、自然科学的宇宙観とは別の宗教的宇宙観の価値を改めて見いだされて「世界大相図」や「天竺輿地図」を作成されたのではないかと思うのである。須弥山宇宙観は宇宙が廣大無辺であり、そこには人知を超越した存在があること、そして宇宙もまた無常であり輪廻していることを教えてくれる宗教的宇宙観である。そう受け止めれば先に書いた地平説の矛盾などは気にならない。円

＜日本図書館協会選定図書＞

通上人の「須弥山儀」の図はゼンマイ仕掛けのからくりまで書き込んだため、宇宙を箱庭のようにしてしまい礼拝の対象にはなりにくいのが、存統上人の「世界大相図」には自然に合掌できるように思うのである。冒頭に書いた橋本凝胤上人のご指摘も、「お前たち、もう少し自分の頭でものを考えてごらん」ということと、「信仰は理屈ではないんだよ」という二つの意味を持っているように受け取れるのである。

(了)

『江戸物語』

細田 隆 善八・豊明・著

— 本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に —

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録

● 定価一八〇〇円【付】名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
 電話(〇三)二六九―二九三 二六七―六六三七
 振替(東京)七―一〇九三/千一六二

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

四

行

詩

二

題

門

出

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人

子供たちの整列
つぶらな瞳に緊張の色
新しい出発をめざして
今日は幼稚園の卒業式



彼岸桜

咲きこぼれる花びらに
春の風 おだやかに吹く
水桶に笑顔映して
心供える墓参り

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人



◇ ◇ ◇ 好評新刊 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ A5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一―二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

海と山の狭間で

— 我が思い出に住む犬たち(22) —

木の
した
りゅう
隆
一

糸崎の駅に降り立って、私は汽車を乗り継いで帰るかそれともバスにするかとしばらく迷った。最寄りの三原駅は一つ先、距離にすれば三キロぐらい、時間にすればせいぜい三分のものだったが、日頃汽車に乗りつけない者にとっては、これがかなり億劫な距離であり時間であった。というのは、どちらのコースをとるにしても接続が悪く、その間に待

ち時間という余計なものが介在したからである。

同じ三原市内にありながら糸崎駅は東の外れで、三原駅とは格段の違いがあった。なぜならば機関区に置かれた駅だったから、あらゆる列車はここで機関車を交換したり、石炭や水を補給するために長時間停車した。すべての列車は停車させなければならぬ——そんな不文律があったかどうかは知らないが、停める必要のない列車、例えば天皇のお召し列車でも、瞬時停車させ、そして発車させるのが鉄則になっていると聞いたことがある。ま、それはともかくとして、ことほどさように糸崎駅は山陽本線という交通の大動脈を機能させる上では重要な位置を占める駅には違いなかったが、通常の乗降客は限られており、旅行者には単なる通過駅でしかなかった。だから駅前に数軒の旅人宿がある程度でさびれていたし、駅舎自体も古色蒼然としたローカル駅並の規模で、どう見てもお召し列車を停めるほどの大層な駅には見えなかった。遠距離列車を利用する大方の三原市民にとっては、糸崎駅は不便な駅であった。

「つくし」が出て行ってしまうと、ホームから人影は消え、次の下りのローカル線の発車まで、私は四十分ほど無為な時間を過ごさなければならなかった。いまの子供なら、取り敢えず電話で帰郷第一報を入れるところであろうが、当時の私には電話をするという習慣がなかったし、いまのように手近に電話器が設置されていて、気軽にかけられる時代で

はなかった。一般家庭の電話の普及率は微々たるもので、多くの家庭では電話のある家に取り次ぎを依頼したり、平身低頭して電話器を借りたりする状態だったから、余程緊急の事態でも生じない限り、他家の迷惑を慮って電話をかけるということはしなかった。従ってかかってくることも少なかったから、電話のベルが鳴ると一瞬心臓が高鳴り、受話器を耳にする前に、悪い予感が先走ったものだった。

あれやこれや考えているうちに、四十分も待つのなら電話でもしてみようかなと一度はその気になったが、公衆電話のボックスは待合室の一隅にしつらえられていたから、ホームの端まで行って長い跨線橋を渡り、急な階段を荷物を持って上り下りしてそこまで行くことを考えただけで嫌気がさし、その上、交換手呼び出すための電話器の操作や交換手とのやりとりの煩わしさを思うと、ただ帰ってきたというだけのことに無駄な労力を費すのが馬鹿馬鹿しくなってやめてしまった。一回で速やかに繋がるという保証はどこにもなかったし、母には帰る日だけは葉書で報せてあったから、わざわざ電話してドキッとさせることもあるまいと、私は思ったのである。

ホームの毀われかけた木のベンチに腰をおろすと、午後の日射しが柔らかく体を包んだ。白っぽい日の色にも東京では味わえなかった温もりが感じられて、へああ、やっと帰ってきたんだなと実感できた。微風に乗ってどこからともなく彼岸桜の花びらが飛んでき

て、二三片コートの袖にとまった。へああ、春なんだ。花びらの一片をつまんで、私はしげしげとそれを眺めた。卒業式から後、好むと好まざるとに拘わらず時流に流されて、ひとときとして心の安まることはなかったが、花びらを見ているうちに、はじめて安らかな気分がじわっと心の中に湧いてきた。もしあの時、桜の花びらが飛んでこなかったら、私の人生は大いに変わったものになっていたかもしれない。やろうと思えば、何もかもかなぐり捨てて放浪の旅に出ることだってできたのだから。しかし、私にそれをさせなかったのは、この一片の花びらと、もう一つ虎徹の存在であった。両親の悲嘆や友人の困惑の表情は思い浮かべもしなかったが、何をするにしても今後のことは先ず虎徹の顔を見てからだ——そんなことを漠然と考えていたからである。たかが一匹の犬に過ぎない虎徹ではあったが、私の行動を制約する重要なブレーキの役目を果たしていたのである。

家へは足音を忍ばせて帰った。自分の家に帰るのに何も遠慮することはなかったのだが、虎徹がどんな反応を示すか、それを確かめたかったのである。多分大袈裟に跳びついてくるだろうと想像しながら格子戸に手を入れて錠を解いていると、音を聞きつけて、虎徹は庭の方から飛んできた。そして私の姿を認めると、忽ちちぎれるように尻尾を振り、耳を伏せ、ヒーと悲鳴とも何ともつかぬ声を発して這いつくばい、全身をくねらせていざるように近寄ってきた。

「何だ、お前。腰が抜けてしまったのか」

意外な歓迎の仕方、私は却って戸惑いを覚えたほどだった。首輪に手をかけて引き寄せると、虎徹は懷に顔を突っ込んで、鼻でゴツゴツと私の胸を何度も激しく突いた。そして合いの手のように、ヒーヒーと悲鳴に似た声をあげるのであった。普段は釣り気味の目をしているのに、この時の虎徹は殆ど瞼を閉じて、どちらかというと垂れ目に近い感じで涙をにじませているように見えた。私のはじめて目にするだらしない顔であった。

「よしよし、分かった分かった。もっとしゃきっとしろ、しゃきっと！」

そう言ってなだめているうちに、私の瞼にも熱いものがこみあげてきた。

「あら、帰ったったの。洗濯物入れてたんで気がつかなかった。コテや、どうして吠えて教えてくれなんだの」

茶の間の窓を開けて母が言ったので、私は慌てて母に背を向け、そっと指先で涙を拭いた。

「犬も感極まると、声が出んようになるらしい」

「お前もお前だよ、今日帰ると言ってきただけで時間も報せてこないんだから……。昼からいつ帰ってきても入れるように、お風呂だけは沸かしておいたけどね」

虎徹にかまけた振りをして、母の小言は聞き流したが、それからが大変だった。虎徹は

片時も私から離れようとしなくなったのである。監視されているのも同然であった。私が風呂に入ると、極端に体を濡らすことが嫌いで、水溜まりもよけて歩くような奴だったから、入口で覗き込んで、立ち上る湯気を見ただけでさすがにそれ以上は踏み込んでほかなかったが、しばらくの間うろうろしている姿が曇り硝子に映っていた。

「おい、虎徹。お前も入れよ」

とからかうと、それに答えて前足で硝子を引っ掻いたりしていたが、やがて静かになった。

のんびりと湯に浸るのも久し振りのことであった。私の入浴はどちらかというと鳥の行水に近かったが、この時ばかりは様子を見かたがた二度も薪を足しに母がやってきた。

「虎徹茶の間にいる？」

「うううん、そこにいるんじゃないの？」

「そうかな、いやに静かだけど……。しかし、こう纏わりつかれたんじゃあ、あしたからが思いやられるなあ」

じんわりと肌にしみこむ湯の温もりを楽しみながら、私は壁の外の母と言葉を交わした。「お前が行ってから三日ほど、探し回ってそりや大変だった。そのうち風邪をひいて食欲はなくなるし、お腹はこわすし……。犬も精神的ショックを受けると、体に変調をきた

すらしい。その辺はあんまり人間と変わらんみたいよ。時々、思いついたようにキョオーン、キョオーンと悲しげな声で鳴いて探し回るの、そりゃあ不憫だった。二三日つき纏われても、そのぐらいのことは堪えておやり。……ところで、お父さん変わらないんだろかね」

母に聞かれて、私はへいけねえ、親父のことはまだ一言も母に話していなかった。悪いことしたな」と一瞬ドキッとしたが、それは暖気にも出さず、

「ああ変わらないよ、こちらにいる時ほど飲んじやいないようだし、……その代わり毎晩のように麻雀のカモにされてた」

とだけ告げた。

かなりの時間をかけて風呂を出ると、虎徹は脱衣場の脱ぎ捨てた私の下着の上にうずくまり、もう決して離れはしないからねと言わんばかりに上目遣いに見上げて、チヨコチヨコと尻尾を振った。「悪女の深情け」ふと、そんな言葉が心をよぎった。

夜中に息苦しくなって目を覚ますと、いつきたのか、虎徹は私の胸の上に顔を乗せて軽い軋をかいていた。満ち足りた寝顔だった。

(つづく)

◎『浄土』表紙版画販売についてのご案内

『浄土』三月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京)八―八二二八七

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^く の 生 涯

(十五)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

続・長崎・大音寺にて

現在の、旭蓮社・大阿弥陀經寺第四十世住職の山田智旭^{（智）}が、岩井の弟子となったのも、岩井が大音寺住職となつて二年目のことであつた。

山田の母親・只松ミツは、岩井の長兄・市

次郎の次女すなわち岩井の姪^{めい}であつたから、山田にとつては大叔父に当たるわけである。智海はミツに、生家の安河内家をつがせるつもりでいたらしい。しかしミツが只松家に嫁ぐことになつたため、この構想は崩れ、ミツの妹サトがあとを継いだ。

山田が大叔父の弟子となつたのは大正十五年（一九二五）で、まだ小学校の五年生のとき

だったという。

當時を山田の回想で綴ることにする。

『私は兄弟が、六人おりまして、それもみんな男ばかり。しかも母親が四十代で亡くなったものですから、それで一人はお坊さんになろうとなって、私が選ばれた。選んだのは師匠ですが、ま、親類どうしで話し合ったんでしょね。経済的にも余り楽ではなかっただろうし、口べらしの意味もあつたのだと思います。

それで長崎の大音寺から上阪の途中、博多の駅で列車の中へ入れておけということになった。博多の駅で指定の列車に入ると、寝台車ですから、師匠はもう浴衣を着て、のんびりしてはった。私は田舎者で、遠方へ行ったこともない。汽車

に乗ったこともない。だから見るもの触れるもの、みんな珍しかった。それで長い時間かけて、旭蓮社へ行ったわけですが、大音寺は格の高い寺ですから、師匠はそちらを主にして、自坊のほうへはとどき帰るといふ図式ですね。

その長い汽車の道中なんともなかったのですが、大阪へ着いて市電に乗ったら、その市電の中で、物凄う酔うてしもうて、あげたりしましてね。それを師匠が一所懸命、介抱してくれはった。いまだによう忘れませんが、そういう親切の、非常にある人でした。師匠自身、若いころ非常に苦勞しておるから、人の痛みもよくわかるという面は、たしかにありましたね』(山田智旭談話)

山田が堺にくるより少し前の大正十五年二

月、岩井は総本山知恩院の執事長に任命されていた。前任者の郁芳いくほう隨円ずいえん僧正が、京都黒谷の大本山金戒光明寺こんかいこうみょうじの法主に選挙され、任期を五カ月残して辞任したあとを、襲ったものである。同年七月にはまた再任されている。この間に彼は、二つの建造物を手がけた。納骨堂と華頂会館の建設である。

納骨堂は知恩院がかねてから待望しており、懸案中の懸案となっていたものだが、資金がないためにやむを得ず見送りとなっていたのである。

それが、知恩院の大檀越だいだんごつで大阪在住の小西久兵衛という人が、夫人吉栄とともに発願主となつて、数万円におよび浄財寄進を申し出たために、にわかに現実味をおびて浮上してきたのであった。

この小西久兵衛は、岩井とはかねてから道交のあった篤信者だったというから、恐らく

信仰話の合い間をぬって、多少の打診というか、依頼が岩井からあったことであろう。

山田智旭の執筆した、「歴代上人の行実」によれば、この建設のために、岩井は東西本願寺から高野山、根来寺などにいたる納骨堂や、中尊寺の金堂、宇治の平等院の鳳凰堂まで人を派遣して実地に調べさせ、その結果、「範は近きにあり」で鳳凰堂がお手本ということになったという。

小ぶりながら、屋上に金色の鳳凰を置いた藤原期芸術の精華が、こうして華頂山に出現したわけだが、この納骨堂はいまも大殿（御影堂）に向かって右側の、池のほとりの小高いところに建っている。

華頂会館のほうは知恩院の塔頭たつとうだった忠岸院の跡に、華頂婦人会が発願主となつて建設したホール型の建物である。完成当時はなかなかしゃれていて、一般の市民も講演や音楽、

小劇などに使ったそうだが、この種の建物の宿命で、古びてくるとどうしても利用が少なくなってくる。そこへ——数年前のことだが、宗務庁の建設話が起き、宗務庁から知恩院へ土地貸与の依頼がでて、ついに華頂会館は取り壊された。そして今ではそこに、地上三階地下一階の宗務庁舎が建っている。

それにしてもこの時期、岩井は多忙をきわめたことであろう。長崎と大阪府の堺にそれぞれ寺を持ち、そして京都での公職である。

さらにその上に、五重の勸戒師としての活動が加わる。その教化活動も、執事長となる前と後で、ほとんど度数に変わりが無いのだから、驚くのはかはない。昭和三年の八回を除いては、平均してずっと十回以上を保っているのである。

知恩院の執事長は管長（現在の門跡）^(注2)の任命制だが、任期は二年である。再任の期間が満

期となったところで彼は辞任し、ふたたび寺務と教化活動に専念することになったが、本原邦堂によれば、例の大音寺庫裡の再建はともかく、「檀信徒の評判がよかった」なかで、京都御所の西隣に建つ大本山清浄華院への登壇^{とうだん}がやってくるのである。

浄山時代

清浄華院の沿革は古い。

寺院そのものの創建からいうと、浄土宗の本山級寺院の中では、恐らく信州長野の善光寺に次ぐのではない。善光寺の創建は奈良朝末期とあるのみで明確ではないが、その下限を桓武天皇の京都遷都とすると、延暦十三年（七九四）となって、これは別格に古い。

清浄華院は貞観二年（八六〇）、清和天皇の勅願により天台宗の慈覚大師円仁が、御所内

の道場として開基したと伝えられるが、その約三百十五年後の承安五年（一一七五）、法然上人から円頓戒えんどんかいを受けられた高倉天皇が、浄土宗に改宗されたものである。

その後、場所も御所の外に出て転々としたが、現在の寺町通りに移ったのは、応仁の乱の戦火で壊滅的打撃を受けたあと、豊臣秀吉に時代になってからだという。

年代が古すぎて、気の遠くなるような話だが、そういう由緒によっても察しられるように、明治までは天皇家ならびに公家からの帰依者が多く、住職も出たりして、きわめて縁の深かった寺院である。たびたび火災にあっているが、弘化四年（一八七四）に建てられた現在の伽藍にも、その外形から本堂の内陣にいたるまで、どこことなく優雅な感覚でまとめられているのは、そうした沿革によるのであるう。

智海がここに晋董しんとうしたのは、同山第七十一世の大野法音大僧正が昭和六年十二月に遷化せんげされたその後任としてであるが、その就任は一宗の選挙によって選ばれたものだった。

昭和三十七年（一九六二）の、浄土宗と本派浄土宗の合同による新「浄土宗」の発足以後、各大本山の法主は法主推載委員会の答申にもとづくことになっているが、昭和二十二年（一九四七）の分裂までは、管長（門主）の選出と同様、一宗の選挙によっていたのである。

この種の選挙のときには、その候補該当者である全正僧正（住持）の名が、ずらりと宗報に掲載されるのだが、昭和七年の清浄華院法主選挙では、ざっと七十人の正僧正の名が並んだそうである。

しかし実際に法主の名に値する候補となると一人、多くて二人、まれには三人くらいに絞られてくる。そして候補が複数となれば、

やはり水面下の動きなるものが出てくるのはやむを得ない。ただ浄土宗の場合、法主のよいうな教化系の選挙では、宗政面とはまた異なつて、候補者自身が動くということは、まずない。多くは周辺の政治好きな人物が動くのであつて、それも「ぜひあの人に」という、純粹な動機から出発したものの多いことが、特徴といえようか。

昭和七年の清浄華院の場合、ぜひ岩井智海を考えたのは、郷俊成ごうしゆんせいという大阪教区から宗議会に出ていた人物であつたという。

郷は大阪西清堀組にぞくする天性寺てんしやうじの住職で、小柄な人だつたそうだが、その政治力は大きくて、師匠や先輩から聞いたその切れ味のよさを記憶している年配の人は、今もかなりある。

例えば、こんな挿話がある。

何の選挙であつたか——宗政系の選挙であ

つたことは確かだが、どう票を読んでも一票たりない。郷は「よし、わしにまかせよ」と言つてふらりと出ていったかと思うと、たちまちのうちに住職のいない寺院に住職を作り、ついでに手続きの段取りもすべてすませ、たつた一晚で一票を生み出したというのだ。

昭和初期、大阪には「扶宗会」と「懇話会」という二つの党派があつて、そのどちらであつたかはついに突き止められなかったが、郷はその二つのうちの一派を率いて、大阪から堺、和歌山あたりまで、強い影響力を持っていたといわれる。

その手段だが、これがなかなか面白い。

大阪の浄土宗寺院は、他宗と違つてバラバラに点在せず、ほとんどが「△△寺町」と寺町にそれぞれ地名を冠し、そこに集団をなして存在していた。しかしこれは初めからそうだったのではなく、大阪夏の陣まではバラバ

ラだったのである。そのあと徳川幕府が、一朝事あったときすぐさま寺院を兵舎に転用できると、一定の戦略思想のもとに再配置したものである。ついでにいうと、徳川幕府はこの各寺町を二百五十年の治政の間ついに軍事目的に使用することはなかったが、明治となってわずか八十年たらずの間に、帝国陸軍はたびたび利用した。時流の皮肉といふべきか。

それはさておき――。

この寺町制度に着目して、まず、一つの寺町に一つの頼母子講がおかれた。そしてそれに一人ずつ、世話役がつき、月に一回ずつ金集めの集会が、その世話役のもとで催される。事務が終われば、あと、酒肴が出る。どの程度の酒肴であったか、今となつては知るよしもないが、ともかくサケができれば、言いたいことを言う和尚あり、聞きたいことを聞く和

尚ありで、なかには宗内事情の解説も、当然出てくる。頼母子講の座は一変して意志疎通の母胎となる寸法である。

大阪の浄土宗寺院の団結は戦前、こうして醸成されていったのだが、どうやらこれを案出した智恵者が、郷であったらしい。とすれば彼は、頼母子講を通じてカネの面でも、人心をつかんだにちがいない。

昭和七年の清浄華院法主選挙の運動にも、郷の軍配一閃、この頼母子講というきわめて下世話な組織が、ムックリと動き出したであらうことは、疑いをいれない。

堺の取りまとめについては、梶原重道がある日、師の桑山実成のもとに來客があり、茶を持ってゆくとそれが郷で、郷が桑山に、「あんたは岩井さんとは法類やから、堺組はちゃんとまとめなさいよ」

と話しているのを、聞くともなく耳にした

と語ってくれた。

またすでに、この物語にも登場した大阪大江組・光明寺の滝川秀音は、岩井の養嗣子・龍海を通じて岩井の縁戚でもあった上に、郷の天性寺とは同じ天王寺区内であったから、これまた積極的に動いた一人であると考えていいだろう。

その他については、想像のできる人はあっても、記述できる根拠のありそうな人は、もはや今日では皆無である。

ともあれ、郷を初めとする支持者の努力と票によって、岩井智海は清浄華院第七十二世住職となり、その晋山式は七年三月三十日に挙行された。

清浄華院での彼の在職は二年だが、その間に、寛永五年（一六二八）三月の京洛の大火で類焼した勅使門の再建をはじめ、防火用水池、納骨堂、茶席・清華亭、本堂と寺務所を結ぶ

渡り高廊下、その他諸堂宇に付属するさまざまな設備など、大は建築から小は造作にいたるまで、数えきれないほどを手がけて完成させている。

考えてみると、福知山の法鷲寺らしい、彼は住職となる行く先々で、多くの建築物を残した。これらの記録を読みながら、筆者は「現代禅界の最高峰」と謳われた、神奈川県三島市の龍潭寺に住した山本玄峰老師（住主）の挿話を思い出して、微笑を禁ぜらるを得なかった。それは……、

『——玄峰が住職するのは、名利とは名ばかりの荒れ寺だったが、それらを彼は一つずつ再建し修復していった。手がけたその数は数寺にのぼるといわれるが、あるとき玄峰が列車に乗っていると、その高名を知ってある実業家が、

「お近づきになりたい」

と名刺を差し出した。すると玄峰は、

「いや、わしとはお近づきにならない方が
よろしいよ。お近づきになるとカネの無
心をされて、あんたが損をしますわい」

と言った——」（玉置辨吉編著「回想・

山本玄峰」より要約）

という挿話である。

しかしながら玄峰が、数か寺の荒れ寺を次々と復興していったというのも、彼に頼まれれば喜んで浄財を喜捨する人があったからであらう。それは得がたい彼の徳の高さに、比例したはずである。

岩井にも、玄峰に似るところがあった。彼が声をかけると、昭和初期のカネで万という額のものを、喜捨する人が幾人もいた。

それだけではない。万とはまとまらずとも、

分に応じて寄進する無数の人々がいた。それが智海の、寺院再建や補修を支えた篤信の人々であった。それはまた玄峰同様、彼の教化によって心の安心あんじんをえた人々の数に、比例するはずであった。

ここでちょっと寄進にまつわる、岩井の人柄を語る挿話を記しておこう。

それは前記した清浄華院の納骨堂建立にからむものである。

あるとき岩井が、彼の信者からその親族のお骨を預かってきたことがあった。なるほど在家では困るだろうという軽い気持ちで預かってきたらしいのだが、清浄華院には納骨堂はない。小寺こでらと違って大本山ともなると、裏戸の位牌棚にそういつまでも祀っておけるものではない。困りはてて、墓地に場所をきめ、回向のうえ埋骨した。

ところが、だ。その信者が参詣にきたのである。これには納所^{なうしょ}が目を白黒させた。岩井にいたってはまさに絶句というところだが、なんともいえない渋い顔をして、侍者の梶原に、

「あそこへお連れ申して、拝^{おが}ませてあげなさい」

と言ったそうである。これは窮余の逃げ言葉で、梶原も「はい」とは答えたものの、

「あそこ」がどこだか、さっぱりわからない。いきさつを知っているだけに、まさか墓地へ案内もならず、かくなるうえはと上司の常侍局長・大塚了観に指示をあおいだ。大塚はさすがに年の功で、当時、境内にあった、そう言われればそうも見える小さな館を指して、

「やむを得ん。あそこにお連れせえ」

という始末となった。

の、心が痛んだのは岩井である。

——このときから納骨堂の建設を、真剣に考えはった。

とは梶原の回想だが、岩井はこの新築を、知恩院の執事長時代に知恩院の納骨堂建設を頼んだのと同じ小西久兵衛に依頼し、その浄財を得てついに完成した。遅れ馳せながら、その言質を果たしたのである。

(つづく)

(注1)

山田智旭師(一九一五)は福岡県生まれ。父只松甚一郎は母ミツと同じ粕屋郡山田村猪野の人で、智旭師はその四男。幼名を敬次郎といい、旭蓮社大阿弥陀経寺で育ち、大阪高等学校(旧制)から京都大学哲学科、同大学院に進み、岩井大僧正の管長時代は内侍として知恩院から通学、仏教哲学の研究で知られる久松真一教授に師事した。そのころ山田ハナ氏の養子となり、旭蓮社近

くの龍門寺に住職、戦後の二十九年、大阿弥陀経寺住職に転じた。その間、大蔵出版社で大正新修大蔵經の編集、府立富田林高校校長、京都家政学園中・高校長・大阪府教師会長などを歴任。知恩院の常任布教師でもある。

(注2) 総本山知恩院執事長の任期二年は、昭和三十七年(一九六二)の、浄土宗と本派浄土宗の合同による新「浄土宗」の発足を機に、四年に更改された。

(注3) 法主選挙ならびに大阪教区の意志疎通については、現大阪教区長田尻玄龍師の談話に拠った。しかし田尻師も自身で体験されたことではなく、「先代が語るのを小耳にはさんだ程度」の伝聞の由。これらについて詳しい方があれば、ご教示願いたい。

(注4) 戦前の大阪教区各寺町にあった頼母子講は、ずいぶん古くから存在していたのを郷俊成師が応用したのか、それと

も頼母子講自体も郷師の創案だったのか、不明である。これも詳しい方にご教示ねがいたい。

(注5) 山本玄峰老師(一八六五—一九六二)和歌山県生まれ。臨濟宗の僧。出生は旅館の子とも捨て子ともいわれる。明治十六年(一八八三)眼を病み、ついに失明寸前となって放浪の旅に出、四国遍路の途中、高知県の雪隠寺門前で倒れたところを住職の山本太玄師に救われて出家、以後、雲水生活を送って諸々の禅利で修行したのち、荒れ寺の龍澤寺住職となり再興した。大正十二年、信者の進めと寄進をうけて欧米と印度に歴遊、大正十五年頃から東京白山で月例の接心会を開き、政・財界に多くの帰依者を作った。五・一五事件の井上日召、非法法時代の共産党委員長田中清玄氏らも弟子として教化したほか、池田勇人首相や将棋の升田幸三氏と幅

広く教えた。太平洋戦争末期、まだ
枢密院議長だった鈴木貫太郎（終戦時の
首相）にひそかに降伏を勧告、また戦
後の幣原喜重郎首相に、天皇を象徴と
して護持する策を授けたと伝えられ

る。戦後、臨済宗妙心寺派の管長に推
されたが、すぐやめて三島の龍澤寺に
帰った。名誉や金銭に恬淡な高僧でも
あった。

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL (03) 221-0111

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由（生活の隅々や我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
（とめ下さい。）

一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度

一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年二月二十五日

印刷

平成二年三月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二八七番



教え・しきたり・行事の解説書〔日常勤行式付〕

仏事と信仰生活・浄土宗

宮林雄彦 編

● B 6 版並製
● 百四十二頁
● 定価八百円（送料二〇〇円）

本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

【目次】第一章 仏教と浄土宗の教え
① 仏教の教え／② 仏教の流れ／③ 浄土宗の教え／④ 念仏信仰の真髄／⑤ 寺参り参り／第二章 日々の信仰生活／① お仏壇／② お仏壇への礼拝のしかた／③ その他、仏壇・仏具、お参りの注意／第三章 お経・念仏の実践／① 日常のおつとめ／② その他のお経／第四章 仏教行事の知識／① 年中行事／② 葬式と年忌供養／③ その他の仏教行事



群 書

発行発売 群 書

〒170 東京都豊島区巣鴨4-7-6-403

発売続群書類従完成会

〒170 東京都豊島区北大塚1-14-6

☎東京(03)917-8411
振替口座 東京7-168759

☎東京(03)915-5627
書店でも注文できます。